

(55)1005 「直観が大切」 0701505 締め切り 071505 提出

直観的に判断

われわれは、ときに直観的に物事を判断することがあります。そして、それが後で、極めて的確であったと客観的に証明されることがあります。直観は、直感と書かれたりしますが、直感は表層的で感覚的、あまり根拠がない、直観はもう少し深層意識からくる、観念的で、ある種の根拠があって生まれてくるものと理解します。ここでは、直観について考えてみたいと思います。

多くの世界的にも超一流の科学者たちが、直観の大切さ・重要性について発言しています。2000年ノーベル化学賞を受賞した筑波大学名誉教授白川英樹先生たちの導電性ポリマーの仕事は、あるとき実験をしていて組成物の混合の割合を間違え、思いがけない結果が得られたことがきっかけであったと書いてあ

ったのを記憶しています。思いがけない生成物の重要性を認識したのは、直観によったものと考えられます。それは全くでたらめな根拠のない状態から生まれてきたのではなく、それまでに先行した多くの経験に基づく相同性・相異性を認識できる基本的な能力があったからだと考えます。

直観は、突然やってくる

「ニューアイデアを得る筋道がある方法などあるわけがない。・・・すべての発見は非合理的、または創造的直観の産物なのだ」

(科学哲学者カール・ホッパーの言葉)¹⁾。

このカール・ホッパーは、著名な科学哲学者です。梅棹は「オリジナリティーのある学説が、ひらめきから生まれる・・・。ひらめきを体系化する方法はない。宇宙線のように宇宙のどこからか飛んできて、脳髄を貫いたときにひらめきが起こる」と書いています²⁾。

梅棹は、比較文明学を提唱し、国立民族学

博物館名誉教授で、初代館長を務めた人です。さらにアインシュタインは1918年の講演の中で、「宇宙法則の発見に至る論理的道筋は存在せず、経験すべき対象に対する愛ともいえるものに基づく直感によってのみ、発見される・・・。パイオニアたらしとする科学者は、厳密な思考に加え、帰納によってではなく、芸術的な創造的想像によって生成される新しい着想を鮮明、かつ直感的に想像する力を持たなければならない」³⁾といったとされます。直感と訳されていますが、わたしの考える直観と同じものと考えます。

合理的思考と比較すると

合理的思考の特徴と直観の特徴を対比した論説があります。合理的思考では、1) 時間がかかる、2) 起承転結というような明確な段階を踏む、3) 直線的、4) 意識して努力することが必要、5) 思考過程をたどることができる、であるのに対して、直観の特徴は、

1) 瞬間的 , 2) 脈絡がない , 3) 写真のスナップショット的 , 4) 意識的努力なしに予期せぬときに突然訪れる , 5) 思考過程を説明できないとされます¹)。

状況が通俗的なものであれば , 事実の積み重ねを追跡することによって似たような代わりの考えが出てきます。しかし , 直観は常識的に考えられる範囲の外側から現れてくるので , 新鮮で革新的な可能性を展開させます。直観が創造性に富むものであればあるほど , 数多くの代わりの考えがもたらされることとなります。

直観から斬新な科学法則が生まれる

科学法則と呼ばれるものの多くは、論理的に導きだされたものではなく、ある種のひらめきの結果として得られた直観がきっかけを引き出してくるといえます。その後で秩序立った、すなわち条件付けられた作為的経験とも呼ぶべき実験によって実証され、科学的権

威を持つことになります。科学的根拠の役割は、事実であることの公認を得る手段に過ぎないといえます。

直観は、全体知の認識

直観は、通常の認識とは異なり、全体知の認識とも考えられます。伝統的な中国医学の特色は、主観的・感覚主義的で、診断・施術に医師の施術者としての感覚を重視するものとされています。感覚を鋭く磨き澄ませて診断にあたり、微妙な気の変動を察知して施術するものといえます。この場合の感覚とは、日常的な五感を通じた感覚とは異なるものといえます。私が、感診を勧める根拠がここにあります。

科学の進歩には、直観が必要であることを著名な科学者といわれる人たちが、しきりに言及していることを指摘しました。科学の進歩とは、直観による仮定（＝発想）を追試し、証明することにあるといえます。しかし、現

代科学は直観を理解できず、したがって説明もできません。すなわち直観は非（現代）科学的であることになります。（現代）科学とは極めて限局された領域（パラダイム）において通用する論理と考えざるを得ません。なぜなら、科学的理解は時代によって、とくに当代ではどんどん変わるからです。

当代では、大学などの専門的経営学の教育機関では、コンピューター技術などを駆使した洗練されたといわれる数量解析的手法に大きな人気があり、社会的にもそのような風潮があることから重要視されています。ところが、興味深いことには、世の中の多くの経営者はそのような手法の意義は認めているものの、不確実性の多い現実社会に応用するには、それだけでは足りないと考えています。だいたい、このように数量解析手法が発展し浸透した世の中で、わが国の1990年代初めに起こったバブル景気の崩壊を予測し、予防的に回避できなかつたのは不思議ではありませんか。

どうも，経済社会の波を乗りきり，この世の中に起こることに適切に対応するには，偉大な科学者と同様非凡な方向感覚と豊かな創造性に恵まれている必要があります。そういえば，業績の良い企業の役員室や研究室は，芸術家のアトリエと共通する雰囲気的ななにかがあることはしばしば指摘されることです。

文献

- 1) 神保圭志：直観術（Goldberg P:The Intuitive Edge），p21、工作舎，東京、1998年。
- 2) 梅棹忠夫：日本よ，縦に飛べ！文芸春秋，1998年8月号，p262。
- 3) Inglis B:Trance-a natural history of altered states of mind 笠原敏雄訳、p325、春秋社、東京、1994年。

挿絵

7月末の北大構内第二農場。札幌へ行くと、どうしても北大構内から植物園方面に足が向

くのです。生まれてから30才に離れるまで、札幌での行動の拠点となっていた地域です。すっかり都会化してしまった札幌の中で、昔を偲ばせる風景がまだ残っていると思うのです。